

# フィールド風

(現場)からの

宮田守男

10月中旬、松本信用金庫と取引先で組織する「しんぎん同友会」が松本市内で開催した秋季講演会を聴講する。講師は、北朝鮮による拉致被害者で新潟

産業大学准教授の蓮池薫さん。台風19号で、中央東線が線路内に土砂流入があり「特急あずさ」が不通だったが、東京からマイカーで会場に到着。多くの皆さんに「拉致を具体的に伝えたい」との使命感が強く伝わってくる。定員300名にもかかわらず約900名近い聴講者が会場を埋めた。

1978年7月31日の夕刻、里帰りしていた当時大学生の蓮池さんは、柏崎市の海岸で現在の奥さんである彼女とともに、5人の北朝鮮工作員によって拉致され2002年10月

に帰国、「講演会と同じ日」との話に講演会テーマ「夢と絆」、再会の夢や家族との絆を追い求めている内容をより考えさせられた。いまだ北朝鮮に取り残されたままの人達。拉致された人達の年代も50

代になり、そして帰りをずっと待ち続けている拉致被害者のご家族の高齢化も深刻に。「なにより生存者を早く返して」との叫びは「また一緒に暮らしたい」との夢が、意識のあるうちに一目会いた

い」に変わり、切羽詰まった状況を伝えた。だからこそ北朝鮮に残したことも1年半後に帰国した日が、蓮池夫婦が本場に日本に帰国した日になっているのだろう。拉致によって人生を狂わされ、命

状。わが子に日本語を教える事ができなかった理由、子供が食料不足からやせ細る生々しいエピソードが次々語られていく。最後に蓮池さんへの質問で「私たちが力とされることしたらどんなことですか」は聴講者全員が思いついたに違いない。もしかしたら拉致被害者は完璧に洗脳され、北朝鮮で幸せに暮らしていると。そんなことを考えた時期もあった自分が恥ずかしくなる。今回の話を聞き、絶対そんな事は無いと分かる。今でも北朝鮮に残された拉致被害者は、朝を迎えるたびに絶望して、毎日、日本に帰る事を願っている事実がある。人権課題を提起する拉致問題について改めて考え直す機会に

## 拉致問題を諦めない 日本の姿勢が求められる

なった講演会に感謝だ。(NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上)



松本信金本店役員らが来場者を受付で迎える